

私たちにできること

著者 三浦 そのみ

発表者 三浦かな (中3) かりん (小6) まりな (小2)

1. はじめに

今回は、子ども達がこの5年の間に取り組んだ「安全を守るための活動」を発表させてもらいました。発表者は我が家の三姉妹ですが、子ども達に代わって母親である私が発表をまとめさせていただきます。

我が家の三女まりなは、2018年10月に西興部村で起きた園バス置き去り事件の被害児です。命が助かったのは、偶然お迎えが早まったためで、あと数時間遅かったらどうなっていたかわかりません。命は助かったものの、事件を公にしようとする村から隠ぺいの圧力がかかり、村を追われました。この事件は私たちの人生を大きく変えました。特に長女は正義感が強く、また同じような事故を起こしてはいけないと思い、安全な場所に引っ越してから自分たちの経験を人に伝える活動を始めました。

- 2022 水が持つ二つの顔 水の作文最優秀賞 (長女)
- 2022 ライジャケレンタルステーション
- 2022 「わすれんぞう」 発明コンテスト (三女)
- 2023 「子どもを園バスに置き去りにされて」 (母)
- 2023 「恨みを愛へ」 少年の主張 (長女)
- 2023 「あの日の意味」 (母・長女)

2-1. STOP! 車内放置新聞

自分たちの訴えを多くの人に見てもらうにはどうしたら良いか考え、ちょうど募集のチラシを見た壁新聞作りにチャレンジすることにしました。長女が5年生、次女が2年生の時で新聞を作ったのは初めてでした。車内の温度はどのくらい上がるのか実験したり、オホーツク総合振興局や保育所にインタビューをしたことを記事にまとめました。

また、カナダの友人の自動運転車について取材し、子どもやペットの置き去り防止の仕組みを調べました。この作品は入賞しましたが上位ではなかったので多くの人に見てもらうことはできませんでした。

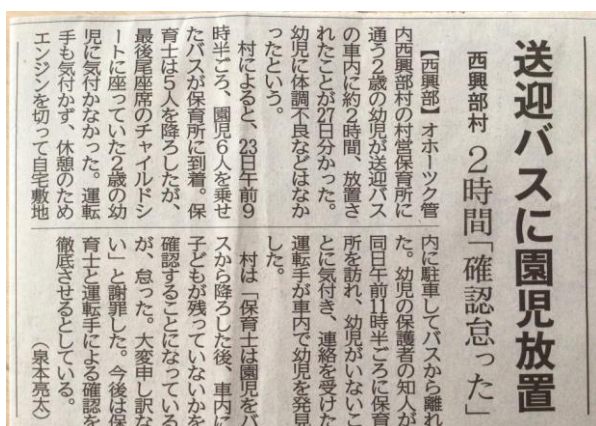


図1 北海道新聞 2018/10/27 朝刊

2. 活動の経緯

事件が起こった直後は、私が活動を始めました。しかし、死亡事件ではないことからなかなか行政が動きません。そのため、当事者である子ども達を中心になって活動していくことにしました。以下の表は、私たちの主な取り組みです。

- 2018 全道の保育施設に注意喚起の文書送付依頼(母)
- 2019 STOP! 車内放置新聞 (長女・次女)
- 2021 ひろがれ! ライジャケ新聞 (次女)



図2 STOP! 車内放置新聞

2-2. ひろがれ！ライジャケ新聞

この後、残念なことに九州で車内放置により三女と同じ歳の男の子が亡くなってしまいました。これをきっかけに「ひろがれ！ライジャケ新聞」の作成を決意。吉川さん、ライジャケサンタさんの協力を得て完成させました。これは、上位36賞に入るチャレンジ賞を受賞し、ネットで新聞を見てもらえるようになりました。



図3 ライジャケ新聞

2-3. 水が持つ二つの顔 水の作文最優秀賞

事件のことを直接的に書くことを避けていましたが、この頃から事件について作文にするようにしました。無理だろうと思いながら書いた長女の水の作文が最優秀賞を受賞しました。これは、園バス置き去り事件とライジャケについて書いたものです。この作文は1年間北海道庁にパネルとなって飾られました。



図4 水が持つ二つの顔 水の作文最優秀賞 (2022/7/31 名寄新聞)

2-4. しんちゃんのリジャケレンタルステーション

子ども達は、ライフジャケ新聞作成時の吉川さんへの取材をきっかけに、ライジャケステーション設置を決意しました。資金を親の私達が出すのではなく自分で稼ぐことにしました。

何もプロジェクトをやったことのない子ども達だったので、手始めに長女が「なるべくゴミ拾いをしないでまちをキレイにする！」という取り組みを始めました。この取り組みで、どうやって多くの人に自分の意見を伝えるのか、またどうやったら資金を集められるのかということを学びました。[森の寺子屋：長女の挑戦 <https://shimokawa-town.note.jp/n/n36720ebb5ebd>]

資金集めの手段として絵や作文の副賞を換金すること、募金活動を選択しました。また、町長への設置の相談も子ども達で行いました。そして、目標額の28,000円を図書券で獲得。2022/7/15に「しんちゃんのリジャケレンタルステーション」を下川町のコモレビに設置しました。



図5 しんちゃんのライジャケレンタルステーション

2-5. 「わすれんぞう」発明コンテスト

事件から我が家では、どうやったら車内放置事件がなくなるか、どうやったら子ども達の命が守られるかという話題が多く出るようになりました。その中で、次女と三女は発明アイデアコンテストにチャレンジすることにしました。これがまりなの発明「わすれんぞう」です。このアイデアでは、被害者だからこそ思いついた工夫がたくさんあります。

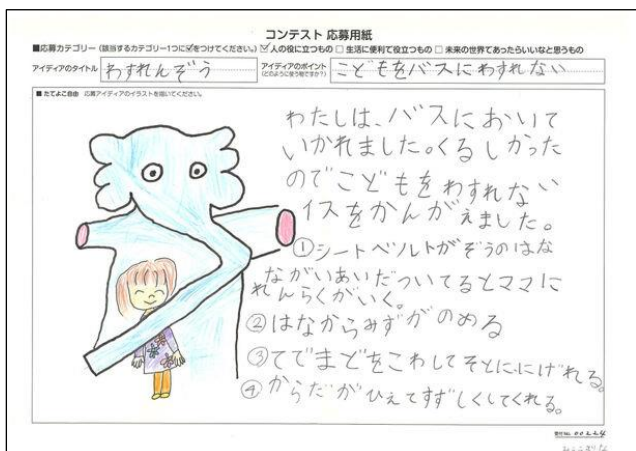


図6 「わすれんぞう」発明コンテスト

<https://www.youtube.com/watch?v=OMdstlc9LpE&t=1s>

2-6. 子どもを園バスに置き去りにされて

生きていたんだから、いいじゃん。これは事件後に関係者から言われた言葉です。しかし、たとえ命が助かったからと言って全てが元通りに戻るわけではないのです。事故は未然に防がなくてはいけません。そのことを伝えたくて、私達の事故後の日々を本にまとめました。



子どもを園バスに置き去りにされて: 園バス放置から生還した子どもと家族の1600日の記録

Kindle版

SONOMI C (著) | 形式: Kindle版

3.8 ★★★★★ 4個の評価

すべての形式と版を表示

我が家の三女は園バスに置き去りにされて、当時を証言できる数少ない生存者だ。四年前に事件が起こり、それから家族で事故防止を訴える活動を現在も続けている。三女の事件は、新聞に「命に別条がない」と書かれた。私はそれまで、「命に別条がない」をニュースで見ている。ああ、良かったと感じていた。しかし、それは生きてはいらなくて、今までの日常が戻ってくるわけではないことを知った。この四年前、一日たりとも事件のことを忘れたことはなく、類似事件や幼児の事件を目にするたびにフラッシュバックを起こしている。どれだけ事故防止を訴えても結局は他人事で行政は何も動かない。被害者は何回も涙しみを味わっていく。お子さんがなくなった方に比べると数倍分の悔しみがもたれない。けれど、生還してこれほどの苦しみがあつた。人生が変わってしまったことを知ってほしい。一語一語でこれを書き上げた。書くことは悪いこと。全て記録に取ってあるので、書こうと思えばいくらでも書くことができる。しかし、子どもが行方不明と知った時の絶望感を思い出し難産産に悩まされるようになってしまったので、とりあえずこのまま本にしてしまおうことにした。

▼続きを読む

図7 子どもを園バスに置き去りにされて

<https://amzn.asia/d/DBTQVYs>

2-7. 少年の主張

家族が事件の被害者となり、どのように社会に訴えかけていくか、吉川さんとの出会いをきっかけに自分にできることは何かを考え抜いた道のりを長女が少年の主張で発表しました。38万人の中から選ばれた12人の全国大会出場者に選ばれ、全国大会で審査委員会審査委員長することができました。大会後の秋篠宮佳子さまとの面会では、多くのことを質問され「わすれんぞう」についても話をしました。印象的だったのは、この大会で内閣総理大臣賞を受賞した子は、交通事故で意識不明の重体になった子だったことです。



図8 少年の主張全国大会 吉川さんとともに

講演の内容 Youtube <https://youtu.be/uyLP517BwWE>

2-8. あの日の意味 Kindle 出版

長女は三月で中学校を卒業します。中学二年生の時に書き、少年の主張の元となったエッセイを昨年末に Kindle で出版しました。



図9 あの日の意味の Kindle での出版

<https://amzn.asia/d/hYG1p0Y>

3. まとめ

吉川さんとの出会いによって私達は大きく変わりました。恨む気持ちを社会に訴えるのではなく、自分たちにできることをできるだけやることにしたのです。こうして前向きに活動することによって、仲間が増えて世界がひろがっていきました。子ども達の活躍が新聞に掲載され認知されていくにつれ、社会も少しずつ変化していきました。子ども達の活躍を見て、声をかけてくれる方が増えていき、自分たちも動こうと考える人が出てきたのです。自分の親が施設で虐待を受けているようだと言われることもありました。私達が西興部村に住んでいた頃にも、障がい者施設での虐待が目撃されていて、役場もそれを把握していましたが何十年も黙認されていました。それが2022年に告発され大きなニュースとなりました。続いて老人施設での虐待行為も明らかになり、役場としても放っておくことはできなくなったのです。私達の活動は、社会全体を見れば小さな活動に過ぎません。しかし、その積み重ねが社会を作っているということを子ども達は身をもって経験しました。安全のための活動以外にも、長女は作文や弁論で何度も最優秀賞に輝き、次女は暗算で10段を取り大会では北海道一になり、三女はポスターになるほど絵が認められるようになりました。きっかけは全てマイナスから始まった園バス置き去り事件でしたが、そこを乗り越えて子ども達はプラスに変えていった気がします。今もなお、被害者家族が事

件の真相を知ることができない事件が多くあります。まだ子ども達が安心して暮らせる社会にはなっていません。しかし、無理だと諦めるのではなくたくさんの人と繋がって少しずつひとりひとりが自分のできることをやって住みやすい社会になることを祈っています。



図10 三姉妹(下川町アイスクャンドルフェスティバルにて)

4. 謝辞

私たちに道しるべを与えてくれた吉川 優子様、ライジャクステーション設置に協力して下さったライジャクサンタさんこと森重裕二様に感謝します。いつも取材してくれた名寄新聞小峰 博之様、北海道新聞の記者の方々、ありがとうございました。